

発問研究・・・子供の発達段階にあわせ、子供が授業で燃える発問をつくる

次の資料で発問を考えてみましょう。

どこの山か、わかりませんが。その山のがけのところに家が一軒建っていました。そこには、若い赤鬼が、一人住んでいました。気持ちの優しい鬼でした。赤鬼は、いつも（人間たちと仲良く暮らしていきたいな。）とっていました。

ある日、赤鬼は家の前に木の立て札を立てました。

「心の優しい鬼の家です。どなたでもおいでください。おいしいお菓子もごさいます。お茶も沸かしてごさいます。赤鬼」

次の日に、村の木こりが立て札を読みました。でも、赤鬼が顔を出すと逃げていってしまいました。赤鬼は、もう悔しくてなりません。涙をいっぱい目にためて、立て札を力まかせに引き抜いて、壊してしまいました。

すると、そこにひょっこりと、仲良しの青鬼がやってきました。赤鬼は、自分の思っていることを正直にうちあけました。わけを聞いた青鬼は、赤鬼に言いました。

「なんだい、そうか。人間たちと仲良くしたいのか。では、こうしよう。僕がこれから村へ下りて行って、わざと大暴れをする。僕が暴れていると、君が来て、僕の頭をぼかぼか殴る。そうすれば、人間たちは、君を見て、きっと褒めるに違いない。もう、そうなればしめたもの。安心しきって、みんなが遊びにやってくる。ね、そうだろう。」

「だが、それじゃ、君に悪いよ。すまないよ。」
「何を言う。友達の間ではないか。さあ。では、出かける。後から、きっと来るんだよ。」

青鬼は、ふもとの村へ行き、一軒の小さな家へ飛び込みました。おじいさんのおばあさんはびっくりして逃げ出しました。二人をちゃんと逃がしておいてから、青鬼は、そこらにあるものを、手当たり次第に投げました。戸を叩いたり、壁を蹴ったり、跳んだり跳ねたり、逆立ちしたりしました。そこへ、赤鬼がかけて来ました。

「やい、この野郎。」

赤鬼は、青鬼を捕まえて、頭をこつんと打ちました。

「だめだよ、それじゃ。もっとぼかぼか殴るのさ。」

赤鬼は、ぼかぼか青鬼を殴りました。そして、青鬼は逃げて行きました。村人たちは、物陰から、じっと見ていました。

「何と感心、立派な鬼だ。本当にいい鬼だ。み

んなで遊びに行こう。」

こうして、赤鬼の家には、村人たちが遊びに来るようになりました。赤鬼は、毎日、にこにこしてしていました。

けれども、ある晩のこと、赤鬼は、ふっと青鬼のことが気になりました。

「青鬼君は、あれからちっともやって来ないが、どうしたんだろう。」

心配になった赤鬼は、青鬼の家を訪ねることにしました。山や谷をいくつか越えて、青鬼の家へやって来ました。ところが、戸が閉まっていて開きません。ふと気が付くと、戸の上のところに、紙が一枚貼られていました。

「赤鬼君。人間たちと、いつまでも仲良く暮らしてください。僕はしばらく、君と別れて、この山を出ていきます。君と僕が仲良くしては、人間たちは、君を疑うかもしれません。そう考えて旅に出ます。けれども、僕は、どこにいようと、君の幸せを祈っています。さようなら どこまでも君の友達 青鬼」

赤鬼は、黙ってそれを読みました。二度も、三度も読みました。それから、たらたらと涙を流して泣きました。 (「泣いた赤鬼」 浜田廣介作)

● 内容項目「信頼・友情」の発達段階別の記述

- ・小学校低学年 友達と仲よくし、助け合う。
- ・小学校中学年 友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。
- ・小学校高学年 互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲よく協力し助け合う。
- ・中学校 友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合う。

【発問計画を立てる一般的な手順】

1 資料分析を行う。

- (1) 資料全体を時間的経過、場面の変化等で大まかに場面の移り変わりが分かる程度に端的にまとめ、場面ごとに登場人物の行為、心の動きを押さえる。
- (2) 主人公の行為、気持ちを支えている価値を考え、本時のねらいに関わる中心的な価値を明確にする。(本資料では信頼・友情)

- (3) 本時のねらいとする価値が含まれている部分をどう扱い、どこまで深く考えさせるか、ねらいや子供の実態に合わせて考える。
- (4) 中心場面を正しくとらえるために必要な場面を明らかにする。(中心発問一つだけで授業を構成する場合は必要ない。)

2 授業の流れを決める

- (1) 資料を読んだときの子供の反応や発達段階から考えた中心課題となる発問を考える。
考えを自由に出し合え、ねらいとした価値が表れている場面を選ぶ。主人公の心が大きく動いている場面を選ぶとよい。
- (2) 中心発問を生かせる前後の発問を考える。
展開の前半では、子供に問題を意識させるもの、後半では資料を通して自分の在り方を見直すことのできる発問になるとよい。
- (3) 導入や展開後段の活動を考える。
- (4) 補助発問を考える。

3 資料の特色や子供の発達から考える

(1) 資料の活用方法別の発問

- ① **批判的活用**—主人公の行為や考えを批判させる。

※発問例 「～したことをどう思うか」「～はどうすればよかったのか」「～はこれからどうすればいいと思うか」等、自己見解や考え、そのわけ問う。

◇高学年や中学校でよく使われる。

●思い切りぶつんだよ」と言われた赤鬼が青鬼の言う通りにしたのをどう思うか。

●赤鬼を置いて旅立った青鬼をどう思うか。

- ② **感動的活用**—感動を大事にした価値把握をさせる。

※発問例 「一番心を動かされたのはどこか」「なぜそこが心に残るのか」「いろんな感じ方を聞いてどう思うか」等、感動したことや、感動したわけを問う。

◇偉人や感動的な出来事を取り扱った資料でよく使われる。

●旅に出た青鬼の手紙を見て赤鬼が泣くところがなぜ私たちの心を動かすのか。

- ③ **共感的活用**—主人公の立場になって考えさせる。

※発問例 「～はどんな気持ちか」「～している○○はどんな気持ちか」「～はどんなことを考えながらしているか」等、登場人物の心情や考えを問う。

◇最も多く使われている。

●青鬼の手紙を読みながら、赤鬼はどんな気持ちでいたか。

- ④ **範例的活用**—主人公の行為や考えを手本や範例とさせる。

※発問例 「～はどんな考え方からそうしたのか」「なぜこのようになったんだろう」等、原因、理由を問い、範例として扱う。
◇資料の読み取りになったり、価値の押し付けになったりしないように扱います。

●人間の仲間ができたのに赤鬼が泣いたのはなぜか。なぜこうなったのか。

(2) 子供の発達段階に応じた発問

① **小学校低学年** 何度も手紙を読む赤鬼の気持ちはどんなだろう。(共感や感動を深める赤鬼への共感を生かす低学年的展開)

② **小学校中学年** 赤鬼はこぶしを振り上げたまま、どんなことを考えているだろう。(迷いや葛藤に追い込む 友達関係に着眼する中学年的な展開)

③ **小学校高学年** 青鬼が「うまいやり方」を考えたことや、それに合わせて赤鬼がしたことをどう思うか。(客観的・批判的な見方を促す 二人の鬼に対する考えや二人の関係を問う高学年的な展開)

④ **中学校** この資料の人間関係から分かる本当の友達とはどんなものだろう。(資料全体のテーマを問う 友情のもつ意味やよさなどの問題を問う展開)

※発達段階や関心に応じた発問の工夫が必要で
です。発問の工夫で子供の心に火をつけよう。